講演 1

ドイツ語圏人類学における P・W・シュミット

山田 仁史
（東北大学・准教授）

皆さん、こんにちは。今日は大役というか、私にはちょっと荷の重いお話をいただきまして、どこまでお話しできるか分からないのですが、この人類学研究所のもともとの発端となったドイツの研究者であるシュミットを手掛かりにして、今後の、未来に関わることまではお話できないかもしれませんが、少しでも皆さまのご参考になればと思って、参りました。

今日、この会場にはいろいろな立場や背景をおもちの方がいらっしゃると思うので、本当に基本的なことからになりますが、タイトルにしました「ドイツ語圏人類学におけるP・W・シュミット」という、そのドイツ語圏というところからお話ししていきたいと思います。

ドイツ語圏といいますと、この地図はドイツ語の方言の分布図なのですが、国境と一致しているわけではありません（図１）。言語と国境の境界というのが一致してはいません。ドイツ本国、それからオーストリアが主なドイツ語の話されている地域ですが、その他にスイスの一部分、イタリアの北部、フランスやベルギー、そして、オランダ語に至っては、この地図ではドイツ

図１　ドイツ方言分布図（相良守峯編『独和大辞典』博友社、一九七七年二四版）

語の方言ということにされていまして、オランダの方はお怒りではないかと思うのですが、このように分類してみることもできるわけです。ドイツ語圏の学問と言ったときには、一応、ドイツとオーストリアとスイスのドイツ語圏ぐらいのくくりで把握していただければいいのではないかと思います。

次に、「人類学」という名称です。英語圏では「社会・文化人類学（social and cultural anthropology; sociocultural anthropology）」という言葉が一般に使われていますが、ドイツ語では長らく「民族学（Völkerkunde, Ethnologie）」という呼び方がされてきました。

ところが、その動きが最近ちょっと変わってきています。ドイツの代表的な研究者の団体であるドイツ民族学会（Deutsche Gesellschaft für Völkerkunde: DGV）というものが、近年に改称しました。私は、参加したわけではないですが、2017年にベルリンで開かれた大会の報告を読むと、そこで改称されたということが書かれていました。改称時点での会員数は731名だったのですが、その過半数以上の得票を得て名称が変わりました。

その背景にどんなことがあったのかということを考えてみますと、3つぐらいの背景を考えていいのではないかと思います。

直接には、1番目として、国際学界へ接続したいという強い思いがあったように思います。英語が国際的な学術言語になっている今日では、そこにうまく接点を設けることが必要だと考えられてきたわけです。とくに第二次世界大戦の後で、ドイツ語圏の、これは民族学、人類学に限らないと思いますが、世界の学術界におけるプレゼンスが低下したことは否めないわけです。そういう中で、取り残されているという意識が高まったことが一つあると思います。

2番目として、「民族学」と名乗ることで、「民族」という一つの人類の集団に焦点を当てることが前提となるわけですが、そうではなくて、「人類」の個々の人々の苦しみや困難と直接に向き合う姿勢を前面に出したということがあると思います。この背景には、当然、ヨーロッパで昨今問題が大きくなっている移民や難民のことも関わってくるわけです。必ずしもエスニックグループというくくりで捉え切れない問題が増加しているということです。

3番目として、「過去との訣別」と書きましたが、1990年に東西ドイツが再統合しました。1999年の元日からはユーロ圏、単一通貨のユーロが欧州で導入されました。このほぼ10年間にドイツ語圏では、過去の民族学の洗い直しといいますか、過去の清算といいますか、振り返りが盛んになされたわけです。とりわけナチスドイツ時代にドイツ語圏の人類学の研究者がどういう関わりをもっていたのかということの見直しが大きく進みました。

それをよく調べてみますと、当時の、1933年から1945年までの人々の動きというのは本当に多様で、ひどいケースですと強制収容所に送られて死亡した民族学者もいました。中には、

ナチスドイツに協力したにもかかわらず、戦後すぐに教授職に戻されて、そのまま在職していた人もいたことが明らかになりました。

こういった過去をあらためて振り返って、いったんそれをなかったものにして、目をつぶるのではなくて、それを踏まえた上で未来に進みたいという動きが1960年代の学生運動のころから盛り上がっていったのですが、東西ドイツの統一を経て、ようやく実現したということが言えると思います。いずれにしましても、今のドイツ語圏の人類学者たちが新しい方向を模索して、何とか国際学界の中でもやっていこうという意識を強くもっているということは言えるのではないかと思います。

ただ、「人類学」という用語、あるいは概念がこれまで存在しなかったわけではありません。振り返ってみますと、「民族学（Ethnologie）」や「民族誌（Ethnographie）」といった概念のほうが、18世紀の末から、主にゲッティンゲンを中心とする研究者たちの間で、少しずつ、普及し浸透していました。これが国際的にも広がりを見せまして、英語圏、それからフランス語圏でも、19世紀の半ばぐらいまで、「ethnology」「ethnography」ということが盛んに言われましたし、一部の流れは現在まで残っているわけですが、19世紀の半ば過ぎぐらいに、「人類学（Anthropologie）」ということがドイツ語圏でもやや盛り上がりを見せたような気がします。

その一つは、アードルフ・バスティアーンの『歴史の中の人類』という3巻の本です。それから、テオドール・ヴァイツがまとめた『自然民族の人類学』という6巻本です。ですから、このころには「人類学」という言葉を……広く人類全体を研究する学問という自負をもってやろうという意識があったのではないかと思います。

この2つのシリーズは、人類学では必ず最初に学ぶことになるエドワード・タイラーの『原始文化（Primitive Culture）』の序文の中で、「私はとくにProfessorバスティアーンとProfessorヴァイツの2冊に恩恵を受けている」というように、とくによく利用したということで名前を挙げて謝辞が述べられているほどです。ですから、こういう過去を振り返ってみますと、方向性としては「人類」全体への関心が復活しているという見方もまたできるのかもしれません。

こうしたドイツの人類学の大きな流れの中でシュミットをどのように位置付けたらいいのだろうかということで、非常に参考になるものがあります。2005年に出ました『One Discipline, Four Ways』という、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカの各国での人類学が実はかなり異なる歩みをしてきたということを、それぞれの国の、それぞれの言語圏の人類学史に詳しい研究者がドイツのハレでレクチャーしたものをまとめたものです。

この中でドイツ語圏について書いているのは、今はもう退官されたのですが、ウィーン大学の人類学の教授をしていましたアンドレ・ギングリッチさんです。ギングリッチさんのまとめの

中に、戦前までのドイツ語圏における人類学の主要な学派を図にしたものがあります。詳しくご覧になりたい方は、この本を後で確認していただければいいと思います。

これを見ますと、戦前にとくに大きなドイツ語圏の学派として2つあったと挙げられています。

一つが文化圏学派で、ウィーンを中心として存在していました。そして、文化圏学派のリーダーになっていたのがヴィルヘルム・シュミットです。もう一つは、フランクフルトにあった文化形態学派で、こちらはフロベニウスがリーダー役をやっていて、その弟子でアシスタントをしていたのがアードルフ・イェンゼンという構成です。

その他に、ちょっと見落とされがちなのですが、機能主義的な研究者の一群がいます。彼らはどこに拠点を置いていたというわけではありませんが、同じような志向性をもっていました。リヒャルト・トゥルンヴァルトのような、実際に綿密なフィールドワークをして、かなりマリノフスキーのような機能主義的な考え方を強くもっていた人もいました。彼らは民族社会学（Ethnosoziologie）と呼ばれることもあります。

これは基本的に優れた見通しだと思うのですが、よく見ますと、ウィーンの文化圏学派の人たちは「神学的な文化史学派」とも書かれています。「神学的（theological）」ということの意味は、先ほどの渡部先生のお話にもありましたが、主にウィーンに集った神言会の神父たちが主導していたからです。シュミットが代表者ですが、その他に、この後、詳しく話していきますが、コッパース、シェベスタ、グジンデといった人々がこの学派を担っていました。

ただ、この2つの学派は、残念ですが、ナチスドイツの下で大幅に力を削ぎ落とされてしまいました。文化形態学派のフロベニウスは、さほどナチスに協力的でもなく、非協力的でもなく、そのまま仕事を続けていたのですが、弟子のイェンゼンは奥さんがクオーターのユダヤ人で、離婚を拒んだために教職を追われるということがありました。戦後、復帰します。それから、文化圏学派のシュミットたちはナチスに批判的だったこともあり、ウィーンにいられなくなってスイスに亡命するということがありまして、苦難の歴史を歩みました。冒頭に言いましたが、ドイツ語圏の人類学が戦後になって力を弱めた一つの原因は、この辺にもあるのではないかと思います。

人間としてのシュミットということに入っていきたいと思います。

パーター・ヴィルヘルム・シュミット、「P」と書いているのは「パーター」の略で「神父」という敬称ですので、彼の本名はヴィルヘルム・シュミットです。彼については、岸上伸啓先生が編集されました『はじめて学ぶ文化人類学』という本の中に私もシュミットの項目を書かせていただいたので、そこに書いたことに基づきながら話していきたいと思います。

彼の生まれは1868年2月16日です。ドイツ西北部のヴェストファーレン州ドルトムントの近くにあるヘルデというところで生まれています。労働者の家庭で、決して豊かな家庭ではありませんでした。生活は楽ではなかったと思います。2歳のときにお父さんを亡くしています。お母さんが再婚して、合わせて4人兄弟の一番上という生い立ちでした。

おそらく勉学を続けるのが難しかったためだと思われますが、15歳のときにオランダのステイルにある神言会（Societas Verbi Divini: SVD）に入ります。そして、その後のシュミットのキャリアを考えますと、本当にびっくりしてしまうのですが、彼は正規の大学教育というのは、ほとんど受けていません。3セメスターにわたってベルリン大学で学んでいるだけです。しかも、オリエント諸言語といったようなことで、彼の後の専門になる民族学、人類学は、正規の教育はほぼ、全くと言っていいほど受けていなくて、独学だということがあります。

その後、彼はオーストリアのウィーンに居を移しまして、ウィーン近郊にあるメートリングにある聖ガブリエル宣教院で教鞭を執ります。ここの学校で教えて、研究にも従事します。あまり知られていないことかもしれませんが、彼は音楽的な才能もあった方で、聖歌隊のための作曲や、また、指揮者、オルガンの演奏、それから、一般向けの説教もしており、かなり多忙な生活だったのではないかと思います。

彼の研究のキャリアのスタートは、まず言語学です。最初は民族学ではなくて、東南アジアやオセアニアの言語、それからオーストラリアの言語の分類というような、非常に難しい仕事だと思うのですが、これをまずやります。そこからだんだんと民族学にシフトしていったという経緯があります。

1906年に、これはよく知られている『アントロポス』という、今も出ている黄色い表紙の雑誌ですが、民族学や言語学の国際的な専門誌を創刊しまして、その初代編集長になります。

第一次大戦のときは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国最後の皇帝であったカール１世の相談役をしたり、聴罪師をしたり、それから、1920年代にはローマ教皇ピウス11世の庇護を得まして、バチカンのラテラノ博物館を創設して、初代館長にもなっています。そういう、ある種の政治的な力量もあった人だと思います。

それから、先ほども言いましたが、ナチスに批判的だったために、1938年にオーストリアがナチスによって併合されますと、ウィーンを脱出せざるを得なくなってスイスに移り、フリブール市近郊にあるフロワドヴィルという、直訳すると「冷たい町」ですが、その後はここで過ごすわけです。フリブール大学で正教授として民族学を講ずるという生活に入ります。

学問的なことにあまり触れずに、人間としてのシュミットについて触れてきましたが、学問的な評価は後に置いておきます。

彼の晩年は非常に寂しいものだったように想像されます。自説、彼の立てた巨大な文化圏という学説は、晩年になるともう支持者がほぼいない状態になっていましたし、同僚たちの中でも孤立して、孤独を感じていたのではないかと思われます。彼のお墓はウィーン郊外にあるメートリングの聖ガブリエル宣教院の墓地にあります。

彼の協力者であったコッパース、グジンデ、シェベスタといった神言会の神父たちのお墓も、これと同じ一角にありまして、幸い私も数年前に行くことができたのですが、著書を通じて見知っている名前がこの墓地の中に点々とありました。そのようなところに眠っています。

少し南山大学との関係にも言及したいと思います。先に述べましたが、1938年以降、ウィーンにいることができなくなったシュミットはスイスに行きフリブールで教えるわけですが、そこを訪れたのが、人類学研究所の初代所長でいらっしゃった沼澤喜市先生です。9年間にわたってシュミットと生活、研究を共にされています。

もともとお生まれは山形県でいらっしゃって、上智大学を出られた後、ヨーロッパに渡り、シュミットの下で博士号を取っています。博士論文のテーマは「日本神話における天地の分離」ということでした。1949年に帰国されて、創立直後の南山大学にいらっしゃったわけです。人類学・民族学研究所から人類学研究所へと、重責を担ってこられました。

他にも、南山大学でかつて出ていた「選書」というシリーズがありまして、この第2巻目がシュミットの『母権』という著作の日本語訳です。山田隆治先生が訳されています。シュミットの生誕100周年を記念したシンポジウムの記録が論文集として、南山大学の選書の4巻目として1971年にも出ています。浅からぬご縁をもっていらっしゃる研究所だということが言えると思います。

このように、シュミットの私生活のようなことをやや詳しく述べることができたのは、アメリカの人類学者であるアーネスト・ブランドウィーという人が『When Giants Walked the Earth』という、シュミットに関する評伝を出していますが、これにかなり詳しい記述があるおかげです。

ただ、この評伝は、ギングリッチさんなどからすると、「あまりにも好意的」に書かれていると、つまり、彼からするとシュミットはそんなに評価すべき人物ではないということだと思うのですが、ただ、私は個人的には、人間のもつ多面性ということを評価するという意味では、ブランドウィーさんの評伝はよくできていると思いますし、面白く読みました。

そういった公的にも私的にも多様な面をもつシュミットという人物について、今後こういう場で過去のことだけに向くのではなくて、未来に向けて何か評価すべきことがあるのだろうかということを少し考えてみたいと思いました。

彼の出した学説では、「文化圏説」という、世界大的な人類文化史の再構成ということを目指

していています。ただ、それがあまりにも図式化に陥ってしまったために、晩年には維持できなくなったという経緯もあります。それから、もう一つ、「原始一神教説」という、つまり人類は最初の段階で一神教、一つの神を信じる信仰をもっていたというカトリック神父としての学説です。こちらもよく批判の対象になるのですが、何かすくい出せるものはないのだろうかということを少し考えてみたいと思います。

まず、オーガナイザーとしての側面です。彼は同僚の神父でもあり人類学者でもあった人々を狩猟採集民の社会へ調査に派遣して、民族誌を続々と刊行させたという大きな功績があります。ヴィルヘルム・コッパースが南米のフエゴ島、パウル・シェベスタはマレー半島やフィリピンの、いわゆるネグリート系と呼ばれる低身長の人々のところ、それから中央アフリカにも行っています。マルティン・グジンデはフエゴ島、それからコンゴのピグミー系諸民族のところに行っています。

とくに狩猟採集民の下に送り出したということは、当然シュミットは、一番、人類の古い段階の生活をある程度残しているのではないかと思われる人々の下に一神教的な考え方がないかということが一つの大きな関心事だったわけですが、結果として生み出された民族誌というのは、そういった宗教的な、あるいは世界観に関わるような問題だけではなく、生業や社会構造、また言語など、とくにグジンデとシェベスタは類いまれなフィールドワーカーたちだったので、シュミットの「大きな理論」に呼応する形で「現場の理論」が構築されたということが言えるのではないかと思うわけです。

グジンデはフエゴ島でたくさん写真を撮っていたようで、最近になって、2015年にフランスのアルルでグジンデの1,000枚以上の写真が整理され、一部が公開されて写真集にもなっています。

これがフエゴ島（Tierra del Fuego）でのグジンデの写真です（写真1）。

最初は布教もある程度目的として現地に入ったわけですが、逆にそこの人々の生活に魅せられてしまいます。現地の人々の信頼も勝ち得て、外部の人には見せないようなイニシエーションにも参加させてもらうことができたということです。

写真１

これがグジンデとコッパースです（写真2）。

今も言いましたが、彼らの写真が多数撮られています。これは非常に質の高いもので、2人が残したエスノグラフィーと併せて非常に高い価値をもつものです。これが再評価されてきています。

写真２

グジンデの写真集は2015年にフランスのアルルの美術館で整理され、シェベスタについても、評伝、それから彼がウィーンに書き送った書簡と併せて公刊されています。ヴィルヘルム・デュプレさんという、オランダのネイメヘン大学名誉教授である宗教哲学者がまとめて、出されています。シェベスタもやはりたくさんの写真を残していまして、これが今、ウィーンにあるオーストリア国立図書館のサイトで一般公開されています。1,000枚以上の写真があります。

こういうグジンデやシェベスタの業績に関しては、概してシュミットたちに辛口なギングリッチさんもある程度の評価を与えています。

このようなことが可能になった背景には、先ほども言いましたが、シュミットの手腕もあると思います。彼は政治的、宗教的な権力者との結び付きもありましたし、資金も、教皇ピウス11世から調査資金を得ており、そういう外交的な手腕にも長けていたということも、同僚たちの活動を可能にした背景にあったと思われます。

2番目として、供犠の理論ということを要旨には書いておいたのですが、これは、さらっといきます。

シュミットが考えたことの一つとして、狩猟採集民社会における獲物の扱いと牧畜民社会における家畜の供犠との間に連続性があるということを言いまして、その後、近年になって、この学説がカール・モイリの学問的伝統を引き継ぐフリッツ・グラーフらに、ある程度評価されています。このことは、シンジルトさん・奥野さんが編集された『動物殺しの民族誌』という本の中で私が書いたものがありますので、今日はあまり触れないでおきたいと思います。

3番目が、今、私が関心を抱いていることの大きな一つで、狩猟採集民の世界観です。原始一神教ということだけで否定してしまうのではなくて、ここから何かすくい出せるものがあるのではないかと私は考えております。

白状しますと、7年も前になりますが、『台湾原住民研究』という雑誌に試論を書いたときに

は、私は狩猟採集民の世界観の中では「動物の主」、「アニマルマスター」というものの存在がやはり主要なもので見逃せないのではないかと、台湾にもこういうものがあるのではないかと探してみたら、どうもありそうだったので、そんなことを書いたことがあるのですが、それだけではないのではないかと思ったわけです。

東南アジアに関して「動物の主」に関わる論文を書かれた方は他にもいらっしゃって、大林太良先生が1970年に、東南アジア大陸部の焼畑農耕民の間で「動物の主」的な存在が見られるということを既に書かれていますし、南山大学で学ばれた古澤歩さんが修士論文を基にして、『南山神学　別冊』の中に「山の神と動物の女主人」という優れた論文を出されています。この中でも東南アジアにちらっと触れていらっしゃいます。私の論文も引用してくださって、この抜き刷りもいただきました。彼は、クネヒト先生にも学ばれたと聞きましたが、その後、研究を続けるのをやめて高校の先生になってしまったようで残念です。

東南アジアについては、「動物の主」的なものもあるかもしれませんが、ここで出てくるのは、やはり農耕民の間での関連です。狩猟採集民は一体どうなのだということが、ちょっと分からずにいたわけです。あらためてシュミットの学説を振り返って、よく検討してみる必要があるのではないかと私は思い始めているところです。まだ取っ掛かりをつかんだあたりなので、お恥ずかしいのですが。

そもそもシュミットは1910年に『人類進化史におけるピグミー諸族の位置』という本を出しており、この中で、人類の古い段階の文化は低身長の人々の間によく保存されているはずだと、これを研究することが大事だということを言って、同僚たちを送り出していくわけです。

同じころにラドクリフ＝ブラウンもアンダマンに行って、有名な『アンダマン諸島民（The Andaman Islanders）』というエスノグラフィーが1922年に出ます。このラドクリフ＝ブラウンの著作の巻末にはアジアのネグリート系の人々の分布図が出ていまして、一番西側がアンダマンです。それから、マレー半島のセマンやフィリピンのアエタの人々が含まれてくるわけです。この人々も、今ではもう調査は難しいかもしれませんが、当時だから、まだサルベージ的にすくい上げることができた貴重な資料ではないかと思います。

現地調査が当時、進行していきました。ヴァンオーヴェルベルクという方も神父です。彼は神言会ではなくて淳心会の神父ですが、フィリピンに長年住んでいました。シュミットは彼に調査費用を工面して、アエタのところを研究してくれないかといって送り出したわけです。ヴァンオーヴェルベルクさんも、やはり現地の人に溶け込んで、長い論文をいくつも『アントロポス』に寄稿しています。

ただ、それよりも早く、私もこれは本当に最近知ったのですが、アイルランド出身のJohn M.

Garvanという人がアエタ調査に行っていました。この人もすごく変わった経歴のもち主のようで、フィリピンがアメリカ領になったということで調査に飛び込むわけですが、アル中になってしまって、森の中でショップキーパーなどをしながら、アエタの人たちと関わりながら調査をしたということです。

でも、その成果たるや、すごい資料で、今は出版されていますが、なかなか出版されずに原稿の状態で出回っていました。それを手に入れたのがジョン・クーパーです。彼も神父です。アメリカのカトリック大学の司祭兼人類学者だった方ですが、彼がすごくいい論文を、自分自身で出した『Primitive Man』という雑誌の中に出していまして、この中で、アンダマンとセマンとアエタの文化にどういう共通性があるかということを論じています。55のポイントを挙げて、その中でアジアのネグリートの人々に見られる共通要素を抽出しています。結論としては、この3つのグループというのは遠い過去からの共通の呪術・宗教的な文化を保持しているという結論に至っています。これについてロバート・ローウィーは、「健全な判断力と資料の精査が組み合わさると何が達成できるかという最も良い事例である」というように激賞しています。

これを見ますと、本当に興味深いです。「動物の主」的な世界観というのは、ほとんど現れて来ません。興味深いのは、雷やセミ、そういうものが重要な役割を果たすわけです。雷や嵐というのが、本当に彼らにとっては恐怖というか、恐るべきものであるわけです。セミは脱皮しますから、そこに神秘力を感じたのかもしれませんが、セミだけではなくて、いろいろな虫、小さな昆虫のようなものが出てきます。シカやクマのようなメガフォーナといいますか、大型の動物が「動物の主」として現れるというような世界観とはかなり違う物の見方をしているわけです。

例えば、雷は天の上で天人が石を転がしている、あるいは天人の声であるということ、また、セミが鳴いているときに邪魔をすると天の神が怒って嵐を起こすということ、セミが鳴いているときは大きな声を出してはいけないということなどを言うわけです。スズメバチは雷の使いであるなどと、何か虫に愛着をもっています。セミは偉い神様の子どもであるというような見方もしています。

このようなことをざっと見ていきますと、東南アジアのネグリート系の人々、狩猟採集民の神話宗教的な世界観の中では、大きな「動物の主」的な存在よりも、むしろ虫など小さい動物が大きな位置を占めており、さらには、雷に対する恐怖というものも卓越しています。

中には、アフリカの狩猟採集民との類例というのも、少しですが比較できそうな事例もあります。そうしますと、初期の人類の世界観の探究、これは今、世界的に神話学を研究する研究者たちの中ですごく盛り上がっているトピックなのですが、そういったことを考える上でも非常に興味深いフィールド、領域ではないかと思います。私の今後の研究課題の一つにもなっていく

ように思っています。

簡単に結びとさせていただきます。結論としましては、シュミットとその学派から今の我々が学ぶことがあるとしたら、巨視的な構想をもって研究を進める姿勢や組織のあり方です。やや硬直化してしまったという負の面もあるかもしれませんが。それから、とくに東南アジアのネグリート系の人々に代表されるような数々の具体的な事例や理論を発展させる可能性もあるのではないかと思います。

ちょっとこれは余計なことかもしれませんが、今日の午前中にパワーポイントをいじっていたら書き加えてしまったので、お話ししますが、学史、研究史を評価するときには、これは私の持論なのですが、3つの次元を考えていいのではないかと思います。つまり、個人としての研究者の生い立ちや私生活に関わるような事件、学問的な系統や思想的な影響関係、それから、大きな社会背景あるいは時代背景。そのような3つぐらいの次元で考えるといいのではないかと思います。

そういう意味では、やや私はシュミットさんの個人的な面に偏ったお話をしてしまったかもしれません。ドイツ語では、そういうことを「プスュヒョロギジーレン（Psychologisieren）」という、心の話に矮小化するというような悪口も言われるのですが、その辺は自覚しています。

最後に弁解をさせていただきます。ズデンドルフというオーストラリアで教えている心理学者の『現実を生きるサル 空想を語るヒト―人間と動物をへだてる、たった2つの違い』という本が、2015年に邦訳が出ました。この中で彼が言っている、他の動物と人間を隔てる、たった2つの違いというのは、簡単に言うと、想像力と共感力です。これが異常に発達というか、他の動物と比べて異常にこの領域が大きくなってしまったのが人間であるということを言っているわけです。

ですから、今後、AIの時代を生きていく人類学のあり方、あるいは、人間らしさとして残っていくものは何かというようなことを考えるときに、想像力や共感力をもって生きていくということが大事だと思いますし、学史を見直すときにも、そういった姿勢が必要とされるのではないかと思う次第です。

最後の絵は、今の弁解の後だから言いやすいのですが、ヴィルヘルム・シュミットが自室に掛けていたと言われるニコラース・マースの「La songeuse（物想う女）」という絵です（図２）。

シュミットは、2歳で実の父親を亡くしたせいか分かりませんが、母親をとても大事に思っていたようです。先ほどの『人類進化史におけるピグミー諸族の位置』という本も母親に献呈されていますし、これは母親によく似ているということで部屋に掛けていたそうです。よく見ると、シュミットさんの肖像画の、あのがっしりした顔立ちとこの女性の顔立ちが似ているようにも思

われますが、そういったシュミットさんの一面も知った上で彼の著作を読むと、また違った読み方もできるのではないかと思った次第です。

ご清聴ありがとうございました。

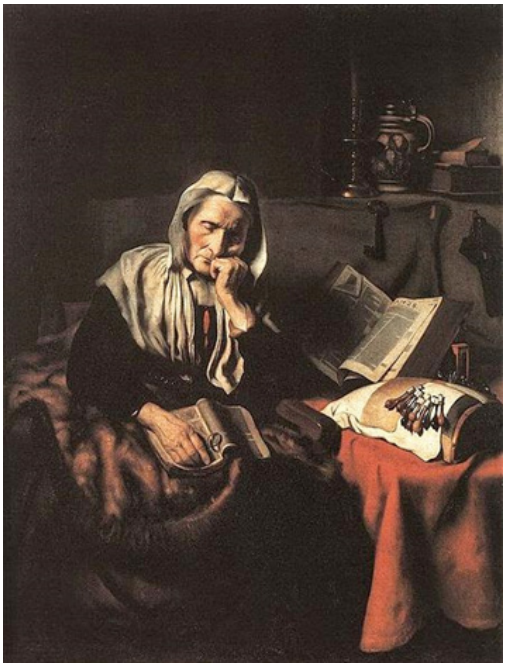

図２　Nicolaes Maes, La songeuse,1656

参照文献

Bastian, Adolf

1860　*Der Mensch in der Geschichte,* 3 Bde. Leipzig: Otto Wigand.

Barth, Fredrik, Andre Gingrich, Robert Parkin & Sydel Silvermanl (eds.)

2005　*One discipline, four ways : British, German, French, and American anthropology*, Chicago: University of Chicago Press.

Brandewie, Ernest

1990　*When giants walked the earth:the life and times of Wilhelm Schmidt, SVD*(Studia Instituti Anthropos, v. 44), Fribourg, Switzerland: University Press.

古澤　歩

2008　「山の神と動物の女主人――比較文化的研究」『南山神学 別冊』23: 1-60。

Radcliffe-Brown, A. R.

1922　*The Andaman Islanders*, Cambridge: Cambridge University Press.

シュミット, ヴィルヘルム

1962　『母権』(南山大学選書2)山田隆治(訳)、平凡社。

Schmidt, Wilhelm

1910　*Die Stellung der Pygmäenvölker in der Entwicklung der Menschheit*, Stuttgart.

ズデンドルフ, トーマス

2015　『現実を生きる サル空想を語るヒト――人間と動物をへだてる、たった2つの違い』寺町朋子(訳)、白揚社。

Tylor, Edward B.

1871　*Primitive Culture*, 2 Vols. London: John Murray.

Waitz, Theodor

1859–72　*Anthropologie der Naturvölker*, 6 Bde. Leipzig: Friedrich Fleischer.

山田　仁史

2012　「台湾原住民における〈動物の主〉試論」『台湾原住民研究』16: 53-68。

2016　「供犠と供犠論――動物殺しの言説史」『動物殺しの民族誌』シンジルト・奥野克巳(編)、pp. 249-291、昭和堂。

2018　「ヴィルヘルム・シュミット」『はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い』岸上伸啓(編)、pp. 9-15、ミネルヴァ書房。